

フッサールの心理主義批判

佐藤英明

- 〈目次〉
1. 序論
 2. 『算術の哲学』における心理主義的論考の背景
 3. 『論理学研究』第I巻の心理主義批判
 4. 形相的心理学としての現象学の形成
 5. 超越論的現象学の着想の萌芽
 6. 結語

1. 序論

現象学と分析哲学は、20世紀の哲学の二つの大きな潮流を形成してきたが、両者の起源はいずれも19世紀末から20世紀初頭にかけてのヨーロッパの思想状況のうちに求めることができる。現在では、現象学と分析哲学は異なった問題設定をおこない、まったく異質な方法論に基づいているように見える。しかし、両者はその起源においては極めて密接な関係にある。フレーゲ、ラッセル、フッサールなどに代表される当時の哲学者の理論において一つの重要なテーマとなっていたのは、心的作用とその対象との関係をどのように捉えるかということであった。そして、この問題に対するアプローチの違いが、その後、二つの潮流を分かちこととなった。

19世紀後半の心理学の興隆は、哲学の世界に「心理主義」という見方をもたらした。論理的な判断や推論は、判断したり推論したりする心的な作用を心理学的に分析することによって解明されるものであり、それゆえ、論理学は論理的概念の解明を心理学に依存するという考え方である。こうした考え方を真っ向から否定したフレーゲは、心的な作用から独立した論理的概念の独自の存在を主張し、「論理主義」の見方を確立した。その後、この立場は分析哲学に受け継がれるが、20世紀後半になると、クワインの「自然化された認識論」によって、分析哲学のうちに新たな心理主義が登場することになる。

他方、現象学の創始者であるフッサールは、当初は布伦ターノ流の心理学を継承し心理主義の立場をとっていたが、その後、一転して心理主義を批判することになる。しかし、この批判はフレーゲ的な「論理主義」への転向を意味するものではなく、独自の「現象学」の創始につながるものであった。

学問の系譜という観点から見れば、心理学は19世紀に哲学から分かれ、独立した学問として成立したといえる。だが、哲学の側から見ると、独立し

ていったはずの心理学に対してどのような見方をとるかが、哲学としての根本的な立場を左右することになったのである。本稿では、心理主義から転じたフッサールが心理主義批判を通じて現象学を形成していった過程を辿ることで、20世紀の哲学に大きな影響を与えた「心理学に対する哲学の態度」を考察する。

2. 『算術の哲学』における心理主義的論考の背景

アメリカの心理学者ポーリングによれば、「心理学 (psychology)」という語がはじめて用いられたのは、16世紀初め頃のことであるという。しかし、19世紀までは心の働きに関する研究は哲学者の手に委ねられてきた。精神は、認識論の研究領域と考えられてきたからである。

17、18世紀にイギリス経験論によって主張されてきた「観念連合の法則」は、19世紀になるとJ・S・ミルらによって継承され、連合主義心理学の流れを形成していった。また、この頃には神経生理学や感覚生理学が急速に発展し、生理学的な知見に基づいて精神作用を説明しようとする動きも現れてきた。ドイツの生理学者ウェーバーの研究を発展させた物理学者フェヒナーは、物理的世界の刺激と心理的世界の感覚とを理論的に関係づけ「感覚量は刺激量の対数に比例する」という法則を定式化するなどして、精神物理学という新たな学問を創設しようとした。ベルリン大学の生理学者ミュラーのもとで学んだヘルムホルツやヘリングも視覚や聴覚に関する実験的研究をおこなっている。

19世紀後半になると、従来のような哲学的思弁から離れ、自然科学的な方法によって心の働きを説明する「心理学」が、大学のなかに位置づけられるようになってくる。ライプチヒ大学教授であったヴントは、1879年に実験心理学のための世界初の心理学研究室を大学の哲学部に開設し、心理学だけで博士号が取得できるようにした。これによって、心理学はアカデミズムの制度のなかに確固たる地位を得ることになる。

しかし、ヴントの心理学は当時の主流とはなかったが、科学的な心理学の方法に関しては他にも多くの考え方があり、さまざまな心理学の学説が登場した。ヴントは、その主著『生理学的心理学綱要』を1874年に出版しているが、同じ年にプレントナーは『経験的立場からの心理学』においてヴント心理学に対する反論を試みている。だが、プレントナーがめざしていたのも、ヴントと同様に心理学を真に科学的な学問とすることであった。プレントナーが重視したのは、当時互いに優劣を競い合っていたさまざまな心理学研究を一つの心理学に統合することであり、そのためには、ヴントのような具体的心理学研究以前に、科学的心理学の学問としての基礎づけが重要であると考えたのである。

1859年生まれのスッサーが心理学と出会ったのは、このような時代であった。しかし、心理学的な研究に取り組むまでは関心は数学へと向けられていた。スッサーは、1876年10月にライプチヒ大学に入学し、そこで3学期間（1年半）おもに天文学を学んでいる。このとき、すでに『生理学的心理学綱要』を出版していたヴントの哲学の講義を聴講しているが、十代のスッサーはこの講義からはほとんど影響を受けなかったようである。78年4月にはベルリン大学に転校し、そこで3年間、ヴァイヤーシュトラウス、クロネッカーのもとで数学を学んだ。81年3月にはウィーン大学に移り、ケーニヒスベルガーのもとで学位論文『変分法論考』を執筆、83年1月に博士号を取得した。その後、ヴァイヤーシュトラウスに招かれ、ベルリンに戻り助手となるが、間もなくヴァイヤーシュトラウスが病で倒れたため、夏学期かぎりまで職を辞し、10月から1年間、志願兵として軍役に服した。このように、スッサーは20代半ばまでは数学者としての道を歩んでいた。

スッサーが哲学研究に転じたのは、大学教授資格取得論文執筆のため、84年に再びウィーンに戻ってからである。そこでのプレントナーとの出会いが、スッサーに哲学専攻の決意をもたらしたのである。

プレントナーは、ヴェルツブルクのカトリックの司祭であったが、1866年に『アリストテレスの心理学』によって大学教授資格を取得しヴェルツブ

ルク大学の私講師もつとめ、72年には助教授に採用された。しかし、ヴァチカン会議で採用された「法王不可謬の教義」に反対する抗議文を起草し、73年には司祭職を離れ、その結果、ヴェルツブルク大学の教授職も失うことになった。翌74年には、ウィーン大学の正教授に任ぜられたが、80年の結婚に際し当時のオーストリアの婚姻法によって聖職者であった者の婚姻が認められないとされたため、オーストリア市民権を放棄し、正教授を辞任。その後は、私講師の資格で講義をおこなっていた。

フッサールがブレンターノのもとで学んだのは、1884年から86年までの2年間で、ブレンターノはすでに正教授の職を失っていた。しかし、フッサールはこの短期間に聴講した少数の講義から大きな感銘を受けたのである。

ブレンターノは心理学を「心の学」ではなく「心的現象の学」であるとした。心理学の研究対象は、物的現象とは区別される心的現象であり、心理学は心的現象を与えられるとおりに記述すべきであるとされた。むしろ、生理学などの知見をもとに心的現象の発生のメカニズムを因果的に解明することも可能である。だが、こうした「発生的心理学」に対し、ブレンターノは、心的現象の構造に関する基本的認識の獲得をめざす「記述心理学」を提唱したのである。発生的心理学のように心的現象の因果的研究をおこなうためには、それによって説明される現象があらかじめ明晰に記述されていなければならないというのがブレンターノの考えであった。例えば、生理学において身体の諸器官の働きに関する因果的研究をおこなうためには、それらの器官に関する精密な解剖学的記述が不可欠である。心理現象の研究に関しても同様の関係が成立し、記述心理学は発生的心理学の基礎となると考えられたのである。この「記述心理学」の立場はフッサールに大きな影響を与えることになる。

ブレンターノは、物的現象とは異なる心的現象の固有の特徴を「対象の志向的内在」に見いだした。中世のスコラ哲学者が用いていたこの概念は、心的現象が何らかの客観をそれ自身のうちに含むことを示している。のちに、この「志向性」という概念を基盤として認識論的探究をおこなったフッサー

ルは、自らの現象学が可能になったのは、ブレンターノがおこなった「志向性というスコラ的概念を心理学の記述的基本概念に変貌させるという一大発見⁽¹⁾」によってであったと述べている。

ウィーン大学のブレンターノの影響によって数学から哲学への方向転換を決意したフッサールは、教授資格論文を完成させるため、ブレンターノの推薦を受け、ハレ大学のシュトゥンプのもとに赴いた。1886年のことである。シュトゥンプは、ヴェルツブルク大学の私講師となったブレンターノが最初に指導した学生の一人で、ブレンターノの強い影響を受け、音響心理学などの分野で実験的方法も用いた研究をおこなっていた。73年に辞任したブレンターノの後任としてヴェルツブルク大学教授となったが、84年からはハレ大学の教授となっていた。フッサールはシュトゥンプの心理学講義などから多くの心理学の知識を学び、87年には教授資格論文「数の概念について——心理学的分析」をハレ大学に提出、シュトゥンプや数学者カントールによる審査を受け、ハレ大学私講師となった。

数学者であったフッサールは、教授資格論文「数の概念について」においてブレンターノ流の心理学の方法を数学の領域にあてはめ、算術学に対する心理学的基礎づけを試みている。これは、算術における最も基本的な概念である基数概念の成立を心理学的に分析し、この概念を基礎づけようとしたものである。1891年には、この論文の成果を基礎とし、その構想をさらに発展させた書物が公刊される。処女作『算術の哲学——心理学的・論理学的研究』第1巻である。ブレンターノに捧げられたこの書物は、数の概念を心的作用の産物と見なす心理主義的確信に基づいている。

しかし、1892年に出版が予定されていた第2巻は公刊されることなく、心理主義に基づく算術の哲学的解明は断念されることになる。『論理学研究』第I巻（以下『論研I』と略記）の序言で、フッサールは、それまでの解明を放棄させた理由の一つは「数学の理論と方法の困難な諸問題」であるとしている。「形式的統一と記号的方法論とを備えた演繹科学の合理的本質」は、容易に洞察されるもののように思われていたが、演繹的諸科学の研究がすす

むにつれて、その解明の困難さが明らかになってきたというのである。⁽²⁾そして、もう一つの理由が、心理主義に対する疑念である。『算術の哲学』第1巻の出版の頃、フッサールは「論理学一般と同様、演繹的諸科学の論理学も心理学にその哲学的解明を期待しなければならないとする当時の支配的確信から出発していた」。しかし「思考作用の心理学的な諸関連から思考内容の論理的統一性に移ったとたん、正当な連続性や明晰性はもはや見いだすことができなくなった」という。⁽³⁾心理主義的解明に対するこうした「原理的な疑惑」によって確信は揺らぎ、フッサールは論理学の本質についての批判的反省へと向かうことになった。

3. 『論理学研究』第I巻の心理主義批判

『論研I』の第1節から第16節において、フッサールは「論理学」に対する自らの立場を明らかにしている。心理主義的な見方をすれば、論理学は心理学に依存する技術学であり、実用的な学科である。他方、論理主義的な見方からすれば、論理学は心理学に依存しない理論学であり、形式的論証的な学科である。フッサールはこの両者のうちいずれが正しいかを論じようとはしない。この論争における「原理的な食い違い」を考察することを通じて、論理学の身分を明らかにするのがフッサールの意図である。

諸々の個別科学はその基礎となる形而上学的諸前提や方法論を正当化することができない。それゆえ、そうした正当化をおこない、個別科学を学問たらしめる学科としての「学問論 (Wissenschaftslehre)」が必要となる。一群の知識 (Wissen) を学問 (Wissenschaft) とするには、知識を体系的に正当化するための方法論的手続きが、そして、そのための規範が必要である。その意味では、論理学はそうした規範を提供する技術学と見なすことができる。しかし、あらゆる規範学、実用学は、その土台としての理論学を前提としている。「AはBであるべきだ」という形式の規範的命題は「BであるAのみがCという性質を有する」という理論的命題を前提としている。後者は、純粹に

理論的な命題であり、規範化をおこなおうとするものではない。それゆえ、論理学の法則は、それ自体は規範的ではない理論的命題である。そして、それは経験的事実に関する自然法則ではありえない。したがって、フッサールの考える論理学は「学問的認識のあらゆる技術学にとって最も重要な土台を形成し、アプリオリな純粹論証学の性格を備えた新しい純粹理論学⁽⁴⁾」である。

論理学をこのように性格づけたフッサールは、論理学的技術学を構築するための理論的基礎を供給するのは心理学であるとする見解に対して論駁を試みる。「ひとは脱却したばかりの誤謬に対しては何よりも厳しいものである」というゲーテの言葉で序言を締めくくったフッサールは、『算術の哲学』において前提とされていた心理主義的な論理学と認識論に対し徹底した批判を展開する。ここでは『論研Ⅰ』の心理主義批判を、(1)心理主義の経験論的帰結、(2)相対主義としての心理主義、(3)心理主義の先入見の三つの論点に分け、概観しておくことにする。

(1) 心理主義の経験論的帰結に対する批判

フッサールによれば、心理主義的立場からは三つの経験論的帰結が導き出されるが、それらはいずれも論駁される。

第一に、心理主義を前提とすれば、論理学の諸規則は心理学の法則に基づくことになる。心理学の法則は経験の一般化であるが、経験的な曖昧さを伴っており精密性を欠いている。曖昧な理論的基盤に基づく規則は、同程度に曖昧でしかありえないはずであるが、論理学的諸規則は心理学の法則とは違い精密である。それゆえ、論理学の諸規則が心理学的法則に基づくことはありえない (§ 21)。

第二に、心理学の法則は自然法則である以上、諸事実からの帰納によってしか正当化されえない。だが、帰納によって正当化されるのは蓋然性にすぎない。こうした心理法則に基づくとすれば、論理法則も蓋然性しかもたないことになる。しかし、論理法則が必当的明証性によって正当化され、ア

プリアリに妥当するものであることは明らかである (§ 21-§ 22)。

第三に、論理法則が心理学的諸事実の規範的転用であるとすれば、論理法則は心的なものに関する法則であり、心的なものの実在を前提とすることになる。しかし、論理法則は事実問題を含まず、認識現象の実在も前提としてはいない。それゆえ論理法則は心的体験の法則ではありえない (§ 23-§ 24)。

(2) 相対主義としての心理主義に対する批判

心理主義は、人間の意識現象の法則を論理法則の基礎とするため、すべての真理は人間の主観に対して相対的であり、人間の種的特性に相対的であることになる。経験的心理学に依拠するにせよ、人間一般の生得的素質としての知性に遡及するにせよ、真理を一般的人間的なものから導出しようとするかぎり、心理主義は種的相対主義とならざるをえない。それゆえ、英国の経験論的論理学や近世ドイツ論理学を代表するミル、ベイン、ヴント、ジクヴァルト、エルトマン、リップスなどの心理主義的な立場はすべて種的相対主義となる⁽⁵⁾。

種的相対主義に対し、フッサールは六つの批判をおこなっている (§ 36)。

- ① 真理が種によって異なるのだとすると、同一の判断が、ある種にとっては真、別の種にとっては偽ということがありうることになる。しかし、同一の判断が真でも偽でもあるというのは、真理の意味の一部をなしている矛盾律に反する。それゆえ、種的相対主義は背理である。
- ② これに対して「そもそも種によって真理概念が異なっており、矛盾律は人間の真理概念の一部をなすとしても、別の種にとっての真理概念には含まれていない」という反論も考えられる。しかし、その場合、そうした種が「真理」と呼んでいるものは、人間が「真理」と呼んでいるものとは異なる。人間が「樹木」と呼んでいるものを「真理」と呼んでいることもあるのだとすれば、「真理」という語が種の数だけ多義的であるというだけであって、「真理」と呼ばれているものがまったく真理ではないということになる。真理という語の意味を変えて真理を論ずるこ

とは不可能である。

- ③ 種的相対主義は、一つの事実である「種の構造」によって真理を基礎づけようとする。しかし、事実は時間的に規定されるが、真理そのものは時間的に限定されるものではなく、時間的被規定性は真理概念と矛盾する。
- ④ あらゆる真理が人間の存在を源泉とするとすれば、人間が存在しない場合、いかなる真理も存在しないことになる。しかし、「いかなる真理も存在しない」という命題は、「いかなる真理も存在しないという真理が存在する」という命題と同じことを意味するはずだが、これは背理である。
- ⑤ 種的相対主義によれば、「人間という種の構造が存在する」という真理は、人間という種の構造の存在によって生じていることになる。しかし、人間とは別の種Sの構造の存在から「Sという種の構造は存在しない」という真理が生じることもありうることになる。だがSという種の構造の非存在という真理の根拠がSという種の構造の存在にあるというのは矛盾である。
- ⑥ 世界は全対象の統一体である。しかし、種的相対主義によれば、全対象の統一体としての世界は存在しない。存在するのはその存在者の種にとっての世界だけである。そして、その存在者の種にとっての世界にはその存在者そのものは含まれていないかもしれない。そして、実際に存在しているあらゆる判断者の種がいずれも、その判断者自身を含む世界の存在を承認できないような構造をもつとすれば、そもそも世界は存在しないということになってしまう。

このような批判によって、種的相対主義としての心理主義は斥けられる。

(3) 心理主義の先入見に対する批判

以上のようにフッサールは心理主義から導き出される経験論的帰結と種の相対主義を批判する。こうした心理主義の帰結に対してと同様に、心理主義

の前提とされている見方についても批判が展開される。フッサールによれば心理主義は三つの前提に基づいている。しかし、それらはすべて人を欺く先入見として論駁される。

第一の先入見 (§ 41)

心的なものを規制する諸規則が心理学に基づいているのは自明である。したがって認識の規範法則が認識の心理学に基づかねばならないことも自明である。

批判：すでに述べたように、論理学の法則それ自体は規範的ではなく、理論的命題である。それは、たんに判断作用の規範化に役立ちうるにすぎない。規範法則はもはや根源的な論理法則ではなく、そこから派生したものにすぎない。心理学の法則は自然法則であり、「事⁽⁶⁾実的な存在および出来事に対する経験的に基礎づけられた規則」である。それに対して、論理法則は「純粹に概念（理念、純粹概念的⁽⁶⁾本質）に基づき、それゆえに非経験的な法則性という意味においてイデアールな⁽⁷⁾法則」である。論理学的規範は、このイデアールな法則としての論理法則の規範的転用によって成立する。他方、心理主義者が認識の規範法則と見なしているのは「種⁽⁸⁾の人間の思考術の技術的規則」であり、リアルな心理学的事実に関する命題である。心理主義者は、このイデアールな法則とリアルな法則との本質的相違を見落としている。

第二の先入見 (§ 44)

論理学で論じられるのは、表象と判断、推論と証明、真理と蓋然性、必然性と可能性、理由と帰結、等の諸概念である。これらはすべて心的現象もしくは心的形成物であるから、論理学の命題や理論は心理学に基づかねばならない。

批判：心理主義者の考えるように、論理学の命題が心理学に基づかねばならないとすれば、純粹数学もまた心理学に基づかねばならないということになる。和や積などの算術的演算の産物についても、加算

する、掛算するといった心的作用に遡ることは、もちろん可能である。しかし、算術的諸概念にこうした心理的起源があるとしても、数学の法則が心理学の法則でなければならないというのは、明らかな誤りである。数や和や積は、数える、加える、乗ずるなどの心的作用のことではないし、それらの表象でもない。それらは表象作用の可能的対象であり、イデアールなものである。それゆえ、リアルな心的体験の一部として捉えることはできない。論理学についてもまったく同じことが言える。表象、判断、推論、証明といった論理学的概念が心理学的起源を有することは確かである。しかし、これらの術語は多義的にならざるをえず、一方では心的形成体を意味するが、他方では「純粹法則性の領域に属するイデアールな個別者を表わす類⁽⁹⁾的諸概念」を意味するのである。心理主義者は、こうした多義性を認識せず、心的現象としての表象や判断のみを問題にしているにすぎない。

第三の先入見 (§ 49)

判断が真と認められるのは、その判断が明証的な場合である。そして明証とは「ある判断にその感情が付帯することによって、その判断の真理を保証するような一種独特の感情」である。それゆえ、論理法則は、誰もが内的経験から熟知しているこの明証感情に関して、その有無を左右する心理学的条件を解明するものであり、心理学的命題である。

批判：論理学の命題それ自体が、明証やその条件について何かを言表するということはない。しかし、論理学的命題を転用することで、明証についての命題に転換することは可能である。しかし、転換された論理学的命題によって示されるのは、明証のイデアールな条件であって、心理的なリアルな条件ではない。例えば、百万の三乗桁の数に関する真理が存在するが、誰もそのような数を実際に表象して計算し、その真理について明証感情をとまなう体験をなすことはできない。この場合、心理学的には明証は不可能である。しかし、そ

れでもイデアールには可能な心的体験である。心理学が探究するのは明証体験の自然的条件であるが、明証は心理学的条件に制約されるだけでなく、イデアールな条件によっても制約されている。それはイデアールな統一体である真理による制約である。「明証は、偶然に、あるいは自然法則によって、一定の判断と結びつく付随的な感情ではない⁽¹⁰⁾」。明証とは「真理の体験」にほかならないのである。

4. 形相的心理学としての現象学の形成

『論研Ⅰ』は、その大部分が以上のような徹底した心理主義批判に費やされ、「純粹論理学序説」というこの巻のタイトルが示すとおり「純粹論理学」の理念を提示することで締めくくられている。1900年に本書が出版されると、多くの読者はフッサールが概念實在論的な論理主義の立場をとり、『論理学研究』第Ⅱ巻（以下『論研Ⅱ』と略記）において「純粹論理学」が体系的に展開されることを期待した。しかし、そうした期待は裏切られることとなった。翌年出版された第Ⅱ巻は「認識の現象学と認識論のための諸研究」と題され、六つの研究を収めたものであった。なかでも第五研究「志向的体験とその内容」と第六研究「認識の現象学的解明の諸要素」は、認識の心理学の研究そのもののように思われ、一部では「心理主義への逆行」とも受けとられた。それに失望した読者も少なくなかった。ハイデガーは、当時、第Ⅱ巻の「認識の成立にとって本質的な意識作用の記述」がやはり「心理学」と思われ、混乱したことを述懐している⁽¹¹⁾、パースは、心理学ではなく論理学について論じるのだとしたフッサールが、思考過程の諸要素について論じはじめたことに批判的に言及している⁽¹²⁾。1901年の『論研Ⅱ』初版の序論には次のような記述も見られ、「心理主義への逆行」という印象は否めない。「現象学は記述的心理学である。したがって、認識批判学は本質的に心理学であるか、あるいは少なくとも心理学の地盤の上のみ建設されうる。それゆえ純粹論理学もまた心理学に依存しているのである⁽¹³⁾」。

だが、むしろ『論研Ⅱ』が「心理主義への逆行」であったわけではない。フッサールの哲学の背後には、一つの根本的な洞察が存在している。それは『算術の哲学』以来、変わることなくその哲学を貫いているものと思われる。「認識する主観と認識される客観とは本来不可分な相関者である」というのが、その洞察である。これは、ブレンターノがその「志向性」概念によって提示した意識と対象との不可分性を受け継いだものである。概念実在論的な論理主義の立場では、客観としての論理法則は主観から独立したものとされ、論理学の体系は、それだけで完結した理論的統一として考察される。他方、心理主義の立場では、論理学の法則は心理学的法則に依存するものとされ、論理的な概念や命題のような客観は主観の一部と見なされてしまう。いずれの立場も「主観と客観は本来的には不可分」という洞察に反するのである。

純粹論理学の研究は、このような洞察を前提としておこなわれている。フッサールにとって論理学は、学問を学問たらしめているものに関わる「学問論」であり、論理学は「真の学問、妥当な学問そのものには何が属しているか、言い換えれば何が学問の理念を構成しているのか」⁽⁴⁾を探究すべきものである。フッサールは、この学問論的な問題を「現代哲学の主要なテーマの一つ」⁽⁵⁾と捉えており、その哲学的な基礎づけが必要であると考えている。しかし、論理的概念や命題のような客観のイデアールな存在を前提として純粹論理学の体系を展開したのでは、論理学は哲学的基礎づけを欠くものとなる。真の基礎づけのためには、「客観は主観と不可分」という洞察に基づき、純粹論理学のための認識批判的な解明による基礎づけが必要である。そのため、研究をフッサールは「現象学」と名づけた。「現象学は純粹論理学の根本概念やイデアールな法則が“発生”する“源泉”を解明するが、それらの概念や法則に関して純粹論理学の認識批判的な理解に必要な“明晰性と判明性”を獲得するには、“源泉”にまで遡って追求しなければならないのである」⁽⁶⁾。

だが、論理学の認識批判的解明としての現象学は、『論研Ⅰ』で批判され

た経験的心理学であってはならない。『論研Ⅱ』の初版（1901年）では「現象学は記述的心理学である」とされていた。先述のように「記述的心理学」という名称は、ブレンターノが「発生的心理学」とは区別される自らの心理学に対して用いていたものである。発生的心理学が、心理現象を生理学的レベルから因果的に説明しようとする理論であるのに対し、記述的心理学は、内的経験の内在的関係を記述的に解明しようとするものである。記述的心理学は「経験的な説明と発生を目的とする心理学本来の研究」とは区別される⁽¹⁷⁾ものであり、それゆえ、心理主義批判は記述的心理学にはあてはまらないというわけである。この「記述的心理学」という表現を用いていたのは、ブレンターノだけでなかった。それは「内的経験の方法的重視と、一切の精神物理的説明の捨象とによって限定される、学問的な心理的諸研究の領域」を示すものとして、多くの研究者に広く用いられていた。だが、フッサールの研究は「一切の理論的—心理学的関心は無頓着な、認識体験の純粹記述的研究」であり「認識論的に極めて重大な意義をもつ」。それゆえ、「記述的心理学」のかわりに「現象学」という呼称を自らの研究に対して用いる⁽¹⁸⁾というのである。

しかし、「認識の純粹記述的研究」とはいつても、リアルな時間的存在である心的体験を扱う点では「発生的心理学」と変わりなく、その点では自らが起こった批判の対象となる。初版の記述に見られるこうした曖昧さを自覚したフッサールは、改訂された第二版（1913年）では「現象学はたしかに記述的心理学ではない⁽¹⁹⁾」として、初版の発言を撤回する。「現象学を記述的心理学と呼んで誤解を招いた私自身の呼び方」の欠点についてフッサールは初版の出版直後に気づいていた⁽²⁰⁾という。そして、1903年にはすでにその訂正を試みている。現象学は「心をもったリアルな存在の心理的な特性や状態に関する経験科学としての心理学では決してない⁽²¹⁾」。現象学は、リアルな事実としての心的状態や体験を論じるのではなく、「“本質”（本質類概念、本質種概念）の純粹に直観的な把握に基づいてのみ洞察されうるものについて⁽²²⁾」論じる。ここでフッサールは、現実世界の事実を扱う経験科学の経験的普遍

性から、純粹直観に基づく本質把握のイデア的普遍性を明確に区別する。「純粹算術が数について、幾何学が空間形態について、純粹直観に基づいてイデア的普遍的に論じる⁽²⁴⁾」のとまったく同じように、現象学は「直観によって把握され分析されうる体験のみを純粹な本質普遍性において論じるのであって、レアルな事実として、つまり經驗的事実として定立され現出している世界の中に生きる人間や動物の体験として經驗的に統覚されるような体験を論じるのではない⁽²⁵⁾」。現象学的な記述は「あらゆる經驗的（自然主義的）統覚と定立の自然的遂行を排除する⁽²⁶⁾」。このような「純粹現象学」によってのみ「心理主義の徹底的な克服は可能である⁽²⁷⁾」という。

学問論としての純粹論理学を基礎づけるには、理論一般の可能性の条件を明らかにしなければならない。理論的認識が可能となる条件にはレアルなものと同様にイデア的なものがある。レアルな条件というのは「個々の判断主観や判断する存在者のさまざまな種（たとえば人間という種）に根ざすレアルな条件⁽²⁸⁾」のことである。これは、その種の生物の判断を可能にする因果的条件であり、心理学的な研究の対象となる。これに対し、イデア的条件の一つは、理論的な統一を可能にするような純粹に論理的な条件である。論理法則に反していれば、理論としての可能性は否定されることになる。フッサールによれば、イデア的な条件にはもう一種類ある。「主観性一般という形式と、認識に対するその関係とに根ざすイデア的な条件⁽²⁹⁾」である。これは「心理学的に制約される人間の認識作用の經驗的特殊性⁽²⁹⁾」とはまったく無関係な理論的認識のアプリオリな可能性の条件である。「たとえば、思考する主観一般が理論的認識を実現するあらゆる種類の作用を遂行する能力をもたねばならない、といった条件はアプリオリに明証的である⁽³⁰⁾」。このようなイデア的な主観的条件は、「ノエシス的条件 (noetische Bedingungen)」と呼ばれる。現象学において論じられるのは、このノエシス的条件である。

このように現象学を、レアルな個別的事実の探究とは区別されるイデア的な本質の探究と位置づけることは、心理主義批判を越えて現象学的探究を開始するための重要な前提となる。そのため、1913年に出版された『純粹

現象学と現象学的哲学のための諸構想（イデー）』第Ⅰ巻（以下『イデーⅠ』と略記）の第一章では、本質学としての現象学の特色を明らかにするための準備として、「事実と本質」の区別が論じられ、事実学と本質学との違いが明らかにされる。さらに、そこでは「本質直観」と呼ばれる本質認識の在り方が考察され、事実に経験的普遍性から本質普遍性にいたる方法が示されることになる。そして、特に事実に心理現象からその本質へと向かうための方法は、現象学の研究方法として「形相的還元」と呼ばれるようになる。

リアルなものを事実として探究する「事実学」は経験科学、実証的学問であり、心理学もその一つである。いかなる事実学に対しても、その形相的本質を探究する「本質学」が可能であるとフッサールは考える。『論理学研究』において「現象学」と呼ばれていたのは、事実学としての心理学に対応する本質学であり、いわば「形相的心理学」である。そして、事実学はその本質法則にしたがわねばならないから、それに対応する本質学に対し依存関係にある。換言すれば「『可能性』の認識は現実性の認識に先行しなければならない⁽³¹⁾」ため、本質学は事実学の基礎となるのである。それゆえ「現象学（形相的心理学）は経験的心理学に対して、ちょうど事象内容を含んだ数学的諸学科（例えば、幾何学や運動学）が物理学に対して基礎的であるのと同じの意味において、方法論的に基礎的な学問である⁽³²⁾」。他方、本質学は事実学には依存しない。「形相的学はその意味上、経験的学の認識成果をおのれのうちに編入することを、原理的に排斥する⁽³³⁾」。「幾何学や現象学は、純粹本質の学問として、リアルな現実存在についての何らの確認にも関知しない⁽³⁴⁾」。幾何学が黑板上の図形の現実存在に関心を抱く必要がないように、現象学も体験の現実存在に何ら関心を抱く必要はないのである。

『論研Ⅱ』で提示された「形相的心理学」としての現象学は、一部では「心理主義への逆行」とも受けとられたが、次第に大きな影響をもたらすようになった。特にミュンヘン大学では、心理主義の立場をとっていた哲学者テオドル・リップスの弟子たちが、『論研』の出版直後からその意義を高く評価し、ミュンヘン現象学派が形成された。フッサールは、『論研Ⅱ』が

出版された1901年にゲッティンゲン大学の助教授に任命されたが、翌年、フッサールの下をミュンヘン大学の一人の学生が訪れた。リップスの弟子のダウベルトであった。自転車でゲッティンゲンを訪れたダウベルトは、『論研』についてフッサールと長時間にわたって討論をおこなった。この議論の後、興奮したフッサールは夫人に「私の『論理学研究』を読んで完全に理解した者がここにいる」と言ったという⁶⁹。ミュンヘン大学では、リップスの「記述心理学」の影響を受けた学生たちを中心に「心理学研究会」がつけられていたが、ダウベルトはプフェンダーとともにその中心メンバーであった。1904年にはフッサールをミュンヘンに招いて、心理学研究会でリップスとの間でも議論が展開され、その後、心理学研究会はミュンヘン学派として現象学運動の拠点となっていった。

5. 超越論的現象学の着想の萌芽

現象学は、形相的還元という方法によって意識体験のレアルな事実の記述から離れ、純粹に直観的にイデアールな本質の形相的記述をおこなう。心理主義からの脱却は、こうして果たされる。だが、フッサールの現象学は形相的心理学にはとどまらなかった。形相的心理学は、意識体験の本質の解明ではあるが、この意識体験はあくまでもレアルなものであって、レアルなものとしての意識体験を形相的観点から探究するにすぎない。意識の客観としての世界もまたレアルなものであり、それは意識に対して「超越的なもの」である。これに対立する意識体験はレアルな「内在」である。意識と世界はレアルな内在と超越として対峙している。しかし内在と超越、主観と客観という対立図式は、「主観と客観は本来的には不可分」というフッサールの洞察に反する。現象学は、世界と意識との不可分な相関関係を捉える「超越論的 (transzendental)」な次元において分析をおこなわなければならない。それゆえ、『イデーネン』では、現象学はたんなる意識の本質論ではなく「超越論的に純化された意識の本質論⁶⁷」であるとされた。

超越論的なものに考察の目を向け、形相的心理学から超越論的現象学へと純化してゆく方法を、フッサールは「超越論的還元」と呼んでいる。よく知られているようにフッサールが「現象学的還元」の着想を得たのは1905年夏のゼーフェルト滞在中のことであったが、現象学が「超越論的」と明示されるようになるのは1907年頃からである。フッサールが超越論的解明を必要とした理由は二つ考えられる。一つは、先述のように主観と客観の不可分の相関関係を考察しようという意図である。超越論的現象学は、「超越論的に純化された意識」とともに「その本質的相関者」としての世界をも考察の対象とするものとして構想されているのである。もう一つは、「基礎づけの徹底主義」を背景とした「絶対的な無前提性への還元」である。これは、「通常の意味で『自明』とされる一切の前提の前提」となる「絶対的地盤」を洞察しようという意図によるものである。フッサールによれば、哲学は哲学である以上、その意味のうちに「基礎づけの徹底主義」を欠いてはならず、その「絶対的地盤」からのみ「一切の哲学的諸学科が、そしてそれだけでなく一切の学問全般の基底が発現する」⁽⁹⁸⁾。こうした「徹底主義」は学問論としての論理学に対する哲学的基礎づけの必要性を訴えた『論研』の議論の延長上に位置している。

しかし、形相的心理学としての現象学から超越論的現象学への発展は、ミュンヘン学派からは「観念論」という批判を受けることとなった。ミュンヘン学派は『論研』の現象学を、リップスの記述心理学の心理主義的な欠陥を克服するものとして評価したが、『イデー』の超越論的現象学は、意識体験の形相的記述を逸脱するものと思われたのである。だが、「超越論的還元」に結びつく基本的な着想は、すでに『論研』までの議論のうちに準備されていたと見ることができる。以下では、それを明らかにしておきたい。

人間は通常、「自然的態度」において普通に生きているときには、世界や事物が現実中存在していると素朴に信じている。自然的態度におけるこの世界の現存の意識は「一般定立 (Generalthesis)」と呼ばれるが、この無造作な定立の作用はエポケーによって「遮断 (Ausschaltung)」することができる。

「超越論的還元」は、こうした「自然的態度における一般定立の遮断」によって、通常は気づかれることのない意識と世界との志向的な相関関係を捉え直すための方法である。⁽⁴⁰⁾

だが、世界の存在定立の遮断がなぜ意識と世界との相関関係の把握につながるのか。その前提となっているのは、意識体験の相関者を意味的なものとする見方である。『論研Ⅱ』第五研究の志向的体験の分析では、意識作用の志向的相関者がアイデアの意味であることが明らかにされるが、アイデアの意味と意識作用との関係については、すでに第一研究において、その基本的な考え方が示されている。

「表現と意味」と題された第一研究は、有意味的な表現の分析によってアイデア的な統一体としての意味そのものを抽出することを目的としている。フッサールが「表現」の典型と考えるのは、いつどこで誰が発話したり記述したりしようと、常に同一の意味を表現するような客観的で一義的な表現である。表情や身振りなどの非言語的な伝達手段は、これとはかけ離れたものとして排除され、いっさいの主観的な表現や曖昧な表現も排除される。そして、最も注目しなければならないのは、話し手の心的諸体験を表す言語的機能が、表現から排除される点である。「二等角三角形の両底角は等しい」という発話は客観的で一義的な表現ではあるが、話し手の判断の内容だけでなく、話し手がそのような判断をおこなっているということ、すなわち判断作用という体験も示している。このように話し手の体験を表す機能を、フッサールは「告知機能」と呼び、告知機能を果たす言語を「指標」と呼んで「表現」から区別する。聞き手にとっては、話し手が自分に話しかけようとしていることも告知されるわけであるから、それは、指標の機能であって、表現の機能ではない。「伝達機能は本質的に、諸表現が指標の働きをするという点に基づいている」⁽⁴¹⁾のである。それゆえ、フッサールの考察は、他者とのコミュニケーションをもたない「孤独な心的生活における表現」へと向かうことになる。同一の意味が多様な主観において志向されることは可能であるし、この意味内実を伝達することも可能である。しかし、指標性を排除した

純粹な「表現」の分析においては、そのような意味内実の伝達を扱うことはできない。「他者が現れるや否や、指標的言語が、もはや消去されえなくなる⁽⁴³⁾」からである。そのため、フッサールは、時間的に個別化される諸作用における同一的意味の反復、すなわち内主観的な意味の同一性の分析へと進むのである。

孤独な心的生活における表現の考察に残されているのは、表現そのものと表現される意味の二つである。「純粹記述」の立場から見ると、この「意味の力を与えられた (sinnelebte) 表現という具体的な現象」は、表現の物理的な側面と「表現に意味を与え、場合によっては直観的充実を与えて表現された対象性への関係を構成するような諸作用⁽⁴⁴⁾」という意識作用の側面とに分けられる。表現に意味を与える作用は「表現が一般に表現である以上、すなわち意味の力を与えられた語音である以上、表現にとって本質的な⁽⁴⁵⁾」作用である。これは「意味賦与作用」あるいは「意味志向」と呼ばれる。他方、意味志向を充実する作用は、表現そのものにとって本質的ではないが、表現の对象的関係を顕在化するという点で「表現に対して論理的に根本的な関係にある」。これは「意味充実作用」と呼ばれる。

表現にとって本質的な意味志向は、個別具体的なレアルな意識作用である。同様の作用が繰り返されたとしても、それは異なった作用である。それに対し、意味そのものは、レアルな個別的意味志向とは区別されるイデア的統一体である。フッサールは、このような表現の分析を通じて、レアルな作用とイデア的意味との相関関係を導き出す。第五研究では、この意味志向とイデア的意味との関係が「志向的体験」全般に見いだせることが明らかにされる。意識作用の对象的関係の仕方に関わるものとして、作用にとって不可欠の成素をフッサールは「志向的本質」と呼ぶが、表現に対する意味賦与作用としての機能を果たす場合には、その志向的本質は「意味的本質」であり、それは第一研究で明らかにされたイデア的統一体としての意味であるとされる。これによって、あらゆる意識作用の不可欠の相関者は意味的なものとして把握されることになるのである。

意味を作用の相関者と見なす考え方は、すでに『論研』出版以前からフッサールの論述のうちに見られる。なかでも「超越論的還元」との関連において特に重要と思われるのは、1894年の「志向的対象」と題された草稿である。⁽⁴⁶⁾これは、トワルドウスキーの著書『表象の内容と対象の理論について』(1894年)に対する批判として執筆されたものであるが、志向性理論に関するフッサールの最初のまとまった試論となっている。そのなかで、フッサールはボルツァーノの「無対象的表象」をめぐる議論をとりあげている。

ボルツァーノは「無対象的表象」すなわち何の対象ももたない表象が存在するとした。例えば、「円い四角」や「金の山」のような表象にはどんな対象も対応してはいない。しかし、トワルドウスキーによれば、あらゆる表象は対象を表象するものであり、どんな表象にも内容と対象とが対応している。表象には、表象を「通して」表象される第一次客観としての「対象」と、表象の「なかで」表象される第二次客観としての「内容」という、二重の客観が対応すると考えられ、内容は対象の「精神的写像」である。「表象された対象」という表現が第一次客観である「対象」を指示する場合には、「表象された」という語は「規定的」に使用されており、その対象が「表象能力を有するものに対して或る一定の関係にあること」を示している。この場合、「対象」という語の意味は何ら変容されることはなく、この語は「真の対象」を意味するものとして使用される。他方、「表象された対象」が第二次客観としての「内容」を指示するものとして使用される際には、「表象された」という語は「対象」の意味を変容するものとなる。たしかに「円い四角」の表象に対応する対象は存在しない。しかし、トワルドウスキーは「表象対象としては」存在するという。それは「表象対象として」という付加語が「存在」の意味を変容するからである。本当は存在せず「本来的存在」をもたない対象でも、表象対象としては存在するというのである。そうした存在は「現実的存在 (wirkliche Existenz)」に対して「現象的志向的存在 (phänomenale intentionale Existenz)」と呼ばれている。⁽⁴⁷⁾

フッサールは「無対象的表象」に関する以上のような議論に重大な欠陥が

あることを指摘している。「表象対象として」という語による意味の変容を、先述の「表象された」という語による「対象」の意味の変容と同様に考えれば、「表象対象として」存在しているのは、対象ではなく内容であるということになる。しかし、それはあくまでも内容が存在するということであって、あらゆる表象に対して対象が存在するというトワルドウスキーの主張には反することになる。しかし、「志向的存在」を有するのが内容ではなく対象であるとしても、それは「本来的存在」を有する対象ではない。その場合、表象されているのは、「表象対象として」志向的存在を有する対象であって、「本来的存在」を有する真の対象そのものではないことになる。だが、そうであるとすれば、対象が現実中存在する場合、表象された対象は現実中存在する対象とは区別される別種の対象であることになってしまう。それに対してフッサールは、このように志向的存在という変容された存在と本来の存在とを区別するのは、トワルドウスキーの「誤った二重化」によるものであり、対象が存在する場合には、存在する対象と表象された対象とは同一でなければならないと主張する⁽⁴⁹⁾。

トワルドウスキーの理論に大きな欠陥を見いだしたフッサールは、「無対象的表象」に対して独自のアプローチを試みている。フッサールによれば、「対象」という表現と「存在する対象」あるいは「現実的对象」という表現は「完全に同義」である。「対象」はその「本来的な意味」においては、存在する現実的な対象である。その意味では、存在しないものは「対象」ではありえない。「対象」という語をこのように本来的な意味で使用すれば、あらゆる表象に対象が対応することはなく、ボルツァーノのいうように「無対象的表象」が存在することになる⁽⁴⁹⁾。このような意味における対象に「存在しない」という述語を与えることは不可能であり、逆に「存在する」という述語を与えることは余剰である。それゆえ、本来的な意味における対象について「存在する」「存在しない」などということは意味をなさない。

他方、「存在の問題」を「度外視」して「対象」という語を使用することも可能である。その場合には、トワルドウスキーのいうように「あらゆる表

象が或る対象を表象する」といえる。⁽⁵⁰⁾ もちろん、この「対象」は本来的な意味における「対象」ではなく、その存在・非存在を度外視した「非本来的な意味における対象」である。このような対象をフッサールは「志向的对象」と呼ぶ。⁽⁵¹⁾ それゆえ、すべての「本来的对象」は、同時に「志向的对象」でもある。それに対し「円い四角」のように現実に存在しないものは、「志向的对象」ではあるが「本来的对象」ではない。このような対象は『「たんなる」志向的对象』と呼ばれる。「志向的对象」と「本来的对象」とは「外延を共有」しており、「志向的对象」のほうが、より広い外延をもつ「対象」概念である。⁽⁵²⁾ 志向的对象は、存在する対象と存在しない対象とに分類することもできる。しかし、「存在する」という述語は、「円い」とか「緑色の」といった述語のように、対象に帰属する性質を表現するものではない。つまり、このような分類は、属性を基準とした対象の分類ではありえない。フッサールによれば、それは「対象が表象される仕方」による分類であり、表象の分類に基づいて、表象された対象が分類されているにすぎない。こうした分類は「対象の擬似分類」であり、その「背後には、本当は表象の分類が隠されている」のである。そして、ここで表象と呼ばれているのは「主観的表象」ではなく「客観的表象（意味）」である。⁽⁵³⁾

対象の擬似的分類は、客観的表象の分類に基づくものにすぎない。けれども、それは「対象Aは存在する」と判断されるときに、表象内容すなわち「意味」に関する判断がなされるということではない。なぜなら「意味Aは存在する」という判断がくだされているわけではないからである。しかし、存在する・存在しないという分類そのものを解明しようとすれば、その場合には、客観的表象すなわち「意味」に目を向けざるをえない。というのも、「表象された対象に関する判断は、その客観的な価値という点からすれば、表象についての判断である」⁽⁵⁴⁾ からである。対象についての判断は、それと「同値の」表象についての判断に変更しうるのであり、両者の差異は、判断が「直接『対象に向けられている』」か「反省的に『表象に向けられている』」かの違いでしかない。⁽⁵⁵⁾

以上のような「対象」の分析は、「存在・非存在の度外視」による「志向的对象」という概念の獲得と、「対象に向けられた」言明と「表象（意味）に向けられた」言明との等置という二つの論点から成り立っている。こうした議論は『論研』でも展開されているが、これは、明らかにのちの「超越論的還元」の着想と重なるものである。もちろん『イデーン』の「超越論的還元」は「基礎づけの徹底主義」という動機と関わっており、「自然的態度における一般定立」という概念を前提としている。そうした論点をここに見いだすことはできない。しかし、1894年には少なくとも萌芽的なかたちで「還元」という方法が用いられていたと考えることができるのである。

このように超越論的現象学の構想に結びつく基本的な考え方は、すでに『論研』以前の論考のうちに見いだすことができる。「現象学的還元」という着想と結びついた「超越論的現象学」が展開されはじめるのは、1905年以降のことであるが、「意味」概念を中心とした志向性理論や「存在・非存在の度外視」を前提とした「志向的对象」概念は、世界の存在定立の遮断によって「世界」を「括弧に入れられたまま保持する」という現象学的還元の方法にとって不可欠の中心的な考え方である。それは『論研』出版以前の草稿からすでに読み取ることができるのである。

それゆえ、『論研Ⅱ』で形相的心理学としての現象学を提唱したあと「現象学的還元」の着想を得たフッサールが「超越論的現象学」を展開したという通説は、フッサール自身の用語の使用という点では正しいにせよ、理論の変遷の内実という点では必ずしもその本質を捉えているとは言いがたい。フッサールの独自の志向性理論はすでに『論研』以前の論考のうちに提示されており、そこにはその後の現象学の展開につながる基本的な考え方が示されている。そうした理論は、その後、心理主義の批判的な検討や形相的心理学としての現象学に対する自己批判などを通して、「超越論的現象学」の構想へと結実していったのである。

6. 結 語

心理主義と論理主義との対立は、19世紀後半に登場した「心理学」の論理学に対する関係をどのように捉えるかという問題に関わるものである。心理学の理論を論理学をも包括しうるものと見れば心理主義の立場に立つことになるし、あくまでも論理学は心理学からは独立したものであると考えれば論理主義となる。ここでは、たしかに心理学と論理学が問題になっているように見える。しかし、本当に問題になっているのは、実は哲学である。

一般には『算術の哲学』で心理主義の立場をとっていたフッサールは、『論研』において反心理主義の立場に転じ、その後、自らの現象学を展開したとされる。だが見方を変えれば、フッサールの探究は、心理学と論理学に対して自らの哲学をどう位置づけるかによって変遷せざるをえなかったのである。フッサールにとって「哲学」とは「一切の認識形成の究極の源泉」に立ち戻って、認識の究極の基礎づけをおこなうものである⁵⁸。当初、ブレンターノの「記述心理学」こそ究極の基礎づけを実現するものであると考えたフッサールにとって、「記述心理学」は、まさに「哲学」であった。だとすれば、心理学は論理学を含むあらゆる認識の基礎づけを可能にすることになる。これを論理主義対心理主義という当時の対立図式にあてはめれば、フッサールの立場は当然「心理主義」ということになる。しかし、その後フッサールは記述心理学が実は哲学ではないことを自覚するにいたる。そのため、自らの哲学を、記述心理学とは異なるものとして探究せざるをえなくなる。このときフッサールにとって心理学は、もはや認識の基礎づけを実現するものとは考えられなくなった。それゆえ心理主義に対しては批判的とならざるをえない。心理主義批判を通して、自らの哲学を「形相的心理学」として捉えなおしたフッサールは、これを「現象学」と呼ぶことになるが、その後これも哲学ではないことが判明する。哲学は「超越論的」でなければならないという確信が、ミュンヘン学派との対立を越えて、フッサールを動かしたの

である。

フッサールの哲学は、理論的な内実としては、『論研』以前から提示されていた理論の着実な展開と見なすことができる。だが、表面的には、心理主義から反心理主義へ、その後、形相的心理学から超越論的現象学へと大きく転換していったかのような印象を与える。一見、矛盾しているかのようにも見えるこの二つの見方が生じるのは、前者が、いわば哲学内部の理論に定位しているのに対し、後者は哲学と心理学との関係に定位しているためである。フッサールの哲学は、心理学に対する自らの位置づけを変更しながら、それを通じて、理論を発展させていったのである。

フッサールにとって心理主義批判は、心理主義という考え方に対するたんなる評価なのではなく、自らの哲学的立場を明確化するためにおのれの足元に向けて照射された光だったのである。

〔註〕

- (1) *Husserliana* Bd.V, S. 155.
- (2) 1892年に出版が予定されていた『算術の哲学』第2巻は、結局公刊されなかった。その理由のひとつは、心理主義的な考え方に対してその後批判的にならざるをえなかったことであるが、それ以上に大きな理由と考えられるのは、第1巻において前提とされていた、さまざまな数が序数ではなく基数から導き出せるという前提の誤りをフッサールが認めたことである。かつてはフレーゲの批判が原因でフッサールは心理主義から反心理主義に転じたというのが通説であったが、モハンティの研究によれば、フレーゲの書評が発表される前に、フッサールはすでに心理主義から脱却していたという。Mohanty, J. N., *Husserl and Frege*, Indiana UP, 1982. 貫成人訳『フッサールとフレーゲ』勁草書房、1991年。
- (3) Husserl, E., *Logische Untersuchungen* Bd. I, 1. Auflage (1900), S. VI.
- (4) *Ibid*, S. 8.
- (5) *Ibid*, S. 124f.
- (6) *Ibid*, S. 164.

- (7) *Ibid*, S. 165.
- (8) *Ibid*, S. 159.
- (9) *Ibid*, S. 173.
- (10) *Ibid*, S. 189.
- (11) ハイデガーは『論研Ⅰ』と『論研Ⅱ』との乖離について、次のように回想している。「1900年に出版されたその著作の第Ⅰ巻は、思考や認識に関する理論が心理学を基礎としては構築されないということを証明することによって、論理学における心理主義を論駁した。しかし、それに対し翌年出版された三倍も大きな第Ⅱ巻は、認識の成立にとって不可欠な意識作用の記述を含んでいる。それゆえ、どう見てもやはり心理学である。そうでないとすれば、第5研究第9節の『《心理現象》に関する布伦ターノの定義の意義』は何のために書かれているのか？ したがって、フッサールは意識現象についての彼の現象学的記述によって、直前に論駁したばかりの心理主義の立場に逆戻りしている。だが、それほど大きな錯誤がフッサールの著作にあるとは考えられない。だとすれば、意識作用の現象学的記述とは何なのか？ 現象学が論理学でも心理学でもないとしたら、現象学の固有性はどこにあるのか？ 哲学のまったく新しい学科が、しかも独自の地位と優位を備えた学科がここに登場したのか？ これらの問のただなかで、私は方向が分からず途方に暮れ、道を見失った。ここに挙げたような明確なかたちでこれらの問を把握することさえ、ほとんどできなかった。」Heidegger, M., *Zur Sache des Denkens*, Max Niemeyer, 1969, S. 83f.
- (12) パースは、「もっぱら論理学について語っているのであって、けっして心理学について語っているのではないと強く主張した直後に、人類の精神のようなものに固有と思われる思考過程の諸要素に専心するようになる」著者の代表としてフッサールの名を挙げている。Peirce, C. S., *Collected Papers* Vol. IV, *The Simplest Mathematics*, Harvard UP, 1960, Book III, paragraph 4.7.
- (13) *Logische Untersuchungen* Bd. II, 1. Auflage (1901), S. 18.
- (14) *Logische Untersuchungen* Bd. I, 2. Auflage (1913), S. 26.
- (15) Husserl, E., *Formale und Transzendente Logik*, S. 6.

- (16) *Logische Untersuchungen* Bd. II, 2. Auflage (1913), S. 3.
- (17) *Logische Untersuchungen* Bd. II, 1. Auflage (1901), S. 18.
- (18) *Ibid.*, S. 18f.
- (19) *Logische Untersuchungen* Bd. II, 2. Auflage (1913), S. 18.
- (20) *Logische Untersuchungen* Bd. I, 2. Auflage (1913), S. XIII.
- (21) *Archiv für systematische Philosophie* IX (1903), SS. 397–400.
- (22) *Logische Untersuchungen* Bd. II, 2. Auflage (1913), S. 7.
- (23) *Ibid.*, S. 18.
- (24) *Ibid.*
- (25) *Ibid.*, S. 2.
- (26) *Ibid.*, S. 18.
- (27) *Ibid.*, S. 7.
- (28) *Logische Untersuchungen* Bd. I, 2. Auflage (1913), S. 111.
- (29) *Ibid.*, S.238.
- (30) *Ibid.*, S. 111.
- (31) Husserl, E., *Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, Erstes Buch (以下 *Ideen I* と略記), 1913, S. 18.
- (32) *Ibid.*, S. 159.
- (33) *Ibid.*
- (34) *Ibid.*, S. 18.
- (35) *Ibid.*, S. 153.
- (36) Schumann, K., *Husserl-Chronik*, 1977, Martinus Nijhoff, S72.
- (37) *Ideen I*, S. 114.
- (38) *Ibid.*, S. 5.
- (39) *Husserliana* Bd. V, S. 161.
- (40) *Ideen I*, S. 48f.
- (41) *Logische Untersuchungen* Bd. II, 2. Auflage (1913), S. 22.
- (42) *Ibid.*, S. 23.

- (43) *Ibid*, S. 24.
- (44) *Ibid*, S. 37.
- (45) *Ibid*, S. 38.
- (46) *Husserliana* Bd. XXII, S. 303–348.
- (47) Twardowski, K., *Zur Lehre vom Inhalt und Gegensatz der Vorstellungen*, 1894.
(Nachdr. d. 1. Aufl. mit einer Einleitung von Haller, 1982), S. 24f.
- (48) *Husserliana* Bd. XXII, S. 303–312, 352f.
- (49) *Ibid*, S. 315.
- (50) *Ibid*, SS. 315–316.
- (51) *Ibid*, S. 315.
- (52) *Ibid*.
- (53) *Ibid*, S. 314.
- (54) *Ibid*, S. 314, S. 318.
- (55) *Ibid*, S. 317.
- (56) *Ibid*, S. 316.
- (57) Vgl. *Husserliana* Bd. XXII, S. XXIX (Einleitung von Rang, B.).
- (58) *Husserliana* Bd. VI, S. 100.